

北タイ農村家庭における壁面写真とその構成

Photographic Displays in a Northern Thai Village

坂元 一 光

Ikko Sakamoto

はじめに

ここで紹介するのは北タイの農村調査のなかで収集された資料のうち家庭の居間の壁面に飾られた一連の写真群（家族写真、王、僧の肖像、ポスターなど）に関するものである。以前、拙稿において第三世界の家族写真の人類学的資料価値とそれをを用いた世界観解読への展望について簡単な「青写真」を提示したことがあった（坂元、1993）。今回の資料はこの展望を前提に収集されたものの一部である。当該の民族社会における価値体系や世界観の研究において、あるいは家族研究の一手段として、現地の住民が撮影したり保存したりしている写真の情報性や資料的価値の高さについては、誰しも十分に予想しうるところである（Plath、1994、真鍋、1990）。ただ、後述する一部の例外を除いて、これまでのところ現地住民の撮影し保存している写真を用いた本格的な研究が盛んに行なわれているとは言いがたい。これはひとつには、そうした写真資料に含まれる情報はその質、量の両面にわたってある種、過剰なものがあり、これらを整理したり分析したりする際の条件統制の困難さにも起因していると考えられる（佐藤、1989）。

今回、紹介する北タイの写真資料の取り扱いに関しては、従来の家族写真を中心にした研究（特に社会学的な領域での試み）において障害となっていたと推測されるその資料としての扱いにくさを軽減する幾つかの要素が加味されている。ひとつは写真の量的な限定である。いわゆる発展途上国における家庭の写真を取り上げることは、まず、その普及の程度から対象における量的限定をもたらすと思われる。次に、観察の対象を家庭に保存された写真全体でなく家庭の居間の壁面に飾られた写真群に限定することで、量からくる分析上の問題はさらに軽減されるだろう。また、前提となる分析の主眼を過去の一時点の撮影状況や写された内容の再現におくのではなく、壁面の展示方法や壁面全体（写真以外の図象も含む）に示されたひとつの意味世界の解読に向けることで、ひとつひとつの写真の厳密な読み取り作業からある程度解放される。さらに、壁面に展示された写真や図象は、現地の人々の人生の中から重要かつ意義深い場面として選択された結果であり、このことは人々の意味世界への接近をより効率的で容易なものにするだろう。

1、壁面の写真・図象を対象とすることの意味

社会・文化分析の手段として広く映像資料を利用することの有効性については、前稿において指摘したとおりである。写真をはじめとして肖像画や映画などの研究利用に関しては、大ま

かにおよそ二つの方向性が考えられる。ひとつはこれら映像の持つ記録性を前提にするものであり、もっぱら今まさに失われようとしている対象の記録や再現に主眼がおかれる。これに対し、もうひとつの方向性の中では、映像は今まさに生じつつある社会・文化現象の分析の手段として用いられる。映像はいわば「現実というフィクション」の背後に隠れたもうひとつの現実を発掘するための媒体として利用されるのである。以下に紹介する現地資料は後者の方向性にそった研究、すなわち北タイの農村家庭の居間の壁面に飾られた写真や肖像の分析を通して、そこに表現されたタイの人々の世界観の一端を明らかにするための材料として収集されたものである。

このような問題意識を共有する社会・文化分析のための映像資料の利用の先行研究として、いくつかの社会的な試みをあげることが出来る。まず、フランス人の写真活動をとりあげたブルデューの研究がその先駆的なものとして注目される。彼は家族写真について機能主義的な解釈を下しながらその「統合儀礼的機能」を強調した（ブルデュー、1990 P24）。また、ボードムとマルティネスは写真の技術的進歩や家族をめぐる社会環境の変化を理由に、ブルデューの儀礼的統合機能の限界を指摘しながら、現代における家族写真分析のための理論的検討を行なっている。それによると、ヨーロッパ人の写真活動が時代とともに身近で大衆的なものになるにつれ、また「家族の個別化」(family individualization) が進行するにつれ、家族写真の形態も儀礼的なものから「民主化」(democratization) し「非公式化」(informalization) してきた。人々が家族写真を通して表現し演出しようとする内容は、かつての「尊ぶべき厳粛さ」から笑顔や気安さで示される「家族の幸せ」という理念に集約されるようになってきたという（Boerdam, J. and Martinius, W. O. , 1980 PP116-117）。

また、佐藤は日本の家族研究における家族写真利用の有効性と限界について考察している。佐藤の場合、日本人のライフスタイルやライフコースの研究が前提となっており、その利用目的も主として過去のある段階における家族のあり方（家族関係や家族規範）を探るための補助資料としての側面に重点が置かれている。したがって、そこで指摘されている写真資料を利用する上での問題は、過去の忠実な復元（読み取り）に際して写真に写った対象を取り巻く状況や背景に関連する条件・変数の統制に大きくかかわっている。

今回の資料紹介に関しては、基本的にはこれら家族写真に関する先行研究を継承しつつも、先に述べたように、いくつかの新たな視点も加味されている。すなわち、タイのようないわゆる第三世界における人々の写真活動を対象としている点、さらに直接の対象を撮影対象が定着された写真葉（プリント）にのみ限定せず、家庭の壁面全体を解読の対象とする点、したがって画像資料の内容も家族写真に限定せず、例えば国王や高僧の肖像写真も含めて考察する点などである。

実際の読み取りの対象となるのは、写真そのものだけでなくそれらが飾られる場としての家庭の居間の壁面全体あるいは展示形態である。一般に北タイの農村家庭の場合、そこには家族の写真の他に王族や地域の著名な高僧の肖像写真が飾られている。仏教はタイ社会においては実質的に国教と同等な位置づけをあたえられ、人々の日常生活における基本的な行動規範となっている。さらに、国王は立憲君主制下の国家元首であると同時に仏教の最高の擁護者として国民統合の聖俗両面における要（かなめ）の役割を果たしている。このことから、タイ人の世界観を探ろうとするとき王権や仏教を抜きにしてこれを捉えることは不可能である。家族写真に込められた家族や親族についてのイデオロギーについても、王権や仏教のシステムを含み

込んだ世界観の一部として解釈してゆく必要があると思われる。

そこで、各家庭の壁面をひとつの大きなフレームに見立て、その限定された枠内の構成要素を通してあるメッセージを読み取るのである。壁面には飾るにふさわしい写真あるいは重要度の高い写真のみが構成要素として残されることになる。

壁面に飾られた写真を対象にすることは、家庭内に所蔵されている写真のなかでも、タイの人々が重要な意味や価値を置いていると思われるものだけを取り扱うことであり、分析の手続き上からもきわめて効率的方法である。「なにが写っているか」から「どのような写真が飾っているか」へと問題意識の視点をずらすことによって、一枚の写真に込められた多様で複雑な情報に振り回される度合いは大幅に軽減されるだろう。佐藤が指摘した家族写真の社会学的アプローチに立ちはだかる問題点は、一家庭に所蔵された写真の数の多さおよびそれぞれの写真の内容を分析する際の変数の複雑さである（佐藤、前掲書、P65）。少なくともこうした問題点に関しては、分析の対象を家庭所蔵の写真から壁面に飾られた写真群に移すことによって、先の数量や変数にかかわる問題は大きく緩和されると思われるのである。

2、居間の壁面写真の事例

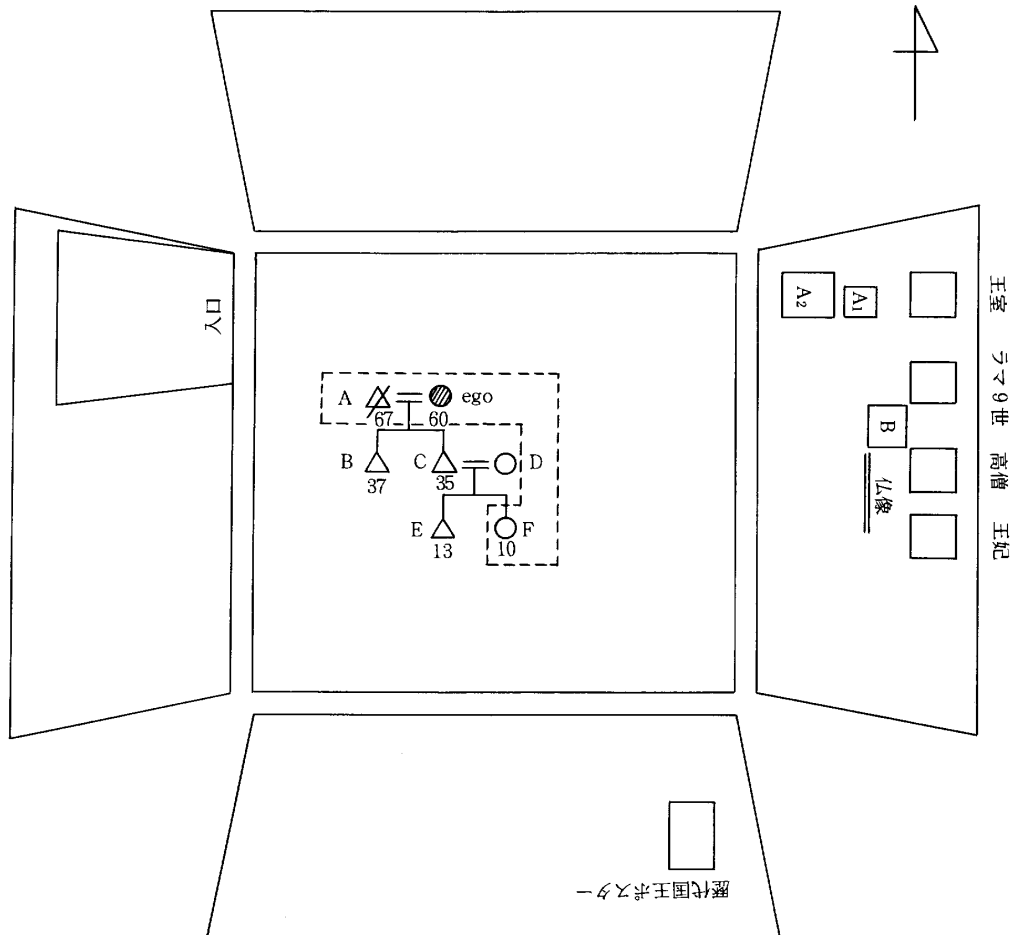
調査地の概要

調査地はタイ北部チェンマイ県メタン郡S村第4集落で、旧都チェンマイ市から国道107号線を40キロ北上した国道沿いのタイ族の農村である。調査当時S村は10の集落（ムーバン）からなっており、調査はそのうちのひとつの集落で実施された。集落の人口は約900人、戸数は約300戸であった。村人の95%が農業（水田稲作、タバコ、豆の栽培等）に従事する。集落内には小学校とワット（仏教寺院）がひとつずつあり、伝統的な自然村落としてひとつの要素をそなえている。資料は1993年10月から11月にかけての約1ヶ月間および補充調査として1994年8月下旬の約1週間の計2回の調査期間中に収集された。なお事例とともに描かれた居間の平面図は実際の居間の概念図であり、本来の構造や寸法を直接反映するものではない。また、方位も磁石を用いた測定によらず、現地調査中に作製された村落地図にもとづいたおおよその方位である。

事例1

事例1は北タイ農村家庭における壁面写真の基本的構成要素が簡潔に示されている例である。家屋は伝統的な高床式の木造建築であり、庭から木の階段を登りきった右手に居間が広がっている。床にはビニール製の床敷きが敷かれている。内壁はなく屋外から張られた壁板がそのまま露出している。その東側には格子のはまった開き窓があり、この窓の上の壁に数葉の写真が飾られている。エゴの夫が最近亡くなり、現在は息子夫婦の下の子（エゴにとっての孫娘）とふたり暮らしである。息子夫婦は男の子をつれて近隣の集落の工場で働いている。窓のすぐ上には仏像を飾るための棚がしつらえてある。まず、その上方にはこの地域で著名な高僧の写真がある。黄色い僧衣をまわって仏具の前に座したカラー写真である。これを左右に取り囲むかたちで現王ラマ9世（左）と王妃（右）の額入り肖像写真が飾られている。調査時点で

事例 1



は現王の写真は棚においてあった。これは僧や王妃と同じ高さで飾ってあったものが止め具が壊れたために仏像の棚の上に立てかけられていたものと思われる。ラマ9世の写真のすぐ左側には現王を中心とする王族の集合写真が掲げられている。一方、北側の壁には歴代王のポスターが一枚貼られている。東壁の王族の写真のすぐ下方にはこの家の主人の半身写真（A1，A2）が二枚飾られている。この主人は2ヶ月前に死亡している。二枚の写真のうち上の小型のものは25年程前に写されたもので、その下の大きな額は葬儀のときに使用された最近の姿をとらえた写真である。最後に、棚の上にはもう1枚の写真（B）が置かれていた。これは25年前に村で行なわれた見習い僧になることを祝う「ブッ・ルツ・カオ」(Bud Lok Kaew)の祭の時に写された記念写真であり母親とその息子（長男）が写っている。

事例1の壁面は以上のように極めて簡素であり、合計8枚の写真および図像から構成されているにすぎない。しかしながら、僧と王族と家族というタイの家庭に飾られている主な写真の категорияはここにすべて集約されていると見てよい。二回の現地調査の中では写真の観察を直接の目的としない訪問も含め、約30戸以上の家庭の居間を観察する機会を得たが、ほぼ全部の家庭の居間の壁面が上記三つの写真の категорияを基本的構成要素としていることを確認した。この意味において事例1は北タイ農村家庭の壁面写真のもつ基本構成パタンの原型を示

しているといえよう。

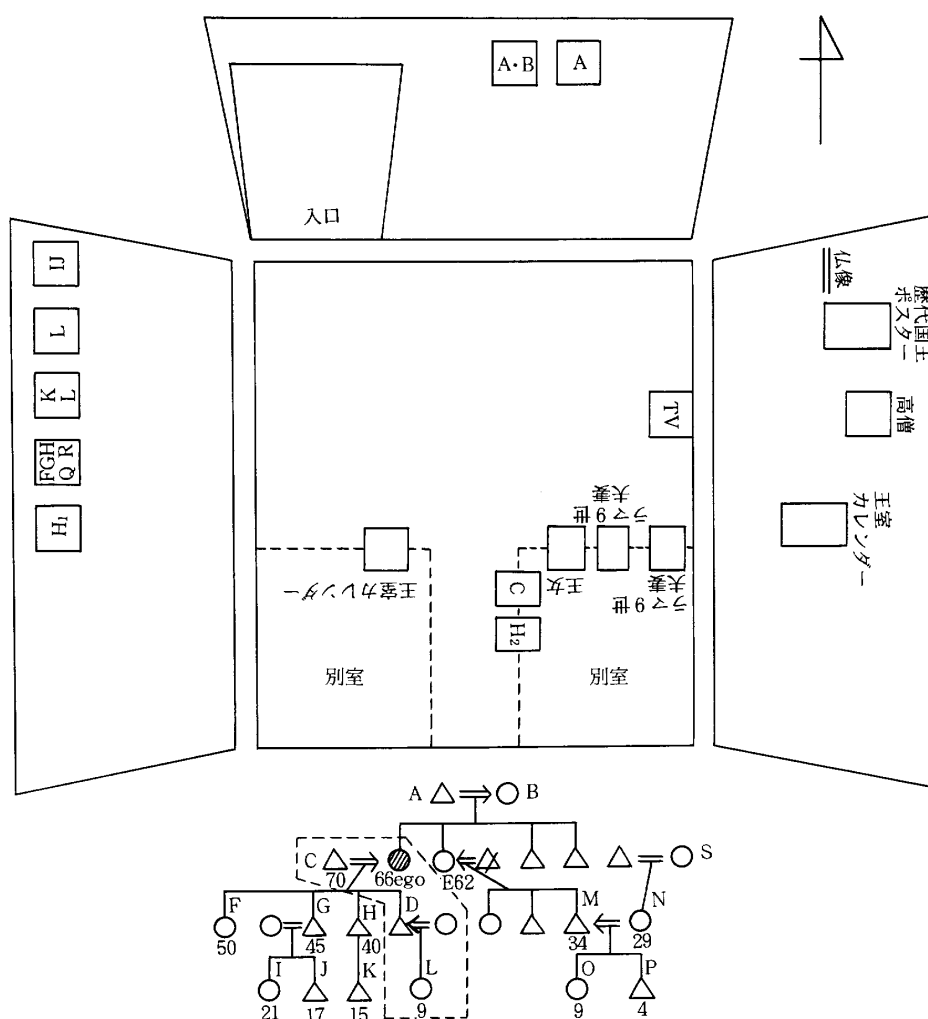
さらにこの家には小さな手形大の2冊のアルバムも保管されている。これらはすべて主人の葬儀のときに写されたものであり、業者が撮影したものである。

事例 2

事例 2 と次の事例 3 とは姉妹を介した親族関係にある。両者は隣同士の敷地に居住している。事例 2 の家屋は66才のエゴがその実母から継承したものであり、現在エゴの息子夫婦と二世帯同居の形態をとっている。エゴの夫と孫を含めての5人暮らしである。エゴはその実母からこの家屋を継承し、これをいま同居中の一番末の息子に相続しようとしている。婚姻後の居住形式は親の世代もエゴの世代も夫が婚入してくる妻方居住で、その子供の世代では息子のところに嫁が婚入してきた。

居間は机や椅子などない伝統的なタイの家屋構造であるが、床はそれほど高くはなく（約1メートル程）、他の伝統家屋に見られるような床下での作業や休息はできないようになっている。図のように物置や息子夫婦の部屋を組み込んだ居間には数多くの写真が飾られてあった。

事例 2



写真の展示構成の状況から見ると、この居間は台所へ抜ける中央の廊下を挟んで東半分と西半分にわけられる。すなわち、東側には王族や仏教関係（仏像、名僧）の写真やイメージが集中し、西側には家族の写真が集中しているのである。

まず、部屋の北東隅の上方には仏像を据えた棚があり、そのすぐ右横には歴代王のポスターが貼られている。そのまた右横にはこの地方の高僧（既に死亡）の写真が飾られている。最初に指摘したように、この東側の壁は仏像、高僧、歴代王のポスターあるいは王室カレンダーで構成されている。この東側壁を取り囲む両側の壁（南と北）のうち、南にも王族関係の図象や写真が飾られている。南側壁のむかって左の方から現王ラマ9世夫妻の肖像画、ラマ9世夫妻の全身肖像画、最後にその王女の写真が同じ高さで横並びに掲げられている。

この南壁の反対側の壁には二枚の額入り写真が掛けられている。一枚はエゴの父親の単独写真（A）であり、もう一枚は同じく父親とその妻（エゴの母親）と一緒に写った写真（AB）である。以上が居間の東半分の写真の構成状況である。

つづいて西側半分に視線を移すと、家族写真のほとんどが先ほどの名僧の壁との向かいにあたる西側の壁に集中して飾られていることが分かる。家族員の一人が一枚ずつ額に収められているものもあれば、ひとつの額に二枚三枚とまとめて入っているものもある。居間の入口はこの西側壁に向かって右側、すなわち北側壁の西隅に開いており、訪問客が入口から居間へ入るとすぐ右手の壁（西壁）の上に沢山の家族写真を見上げる格好になる。

この入口に最も近いところにあるのはエゴの孫たちの子供時代の写真（IJ）であり、ふたりの孫と一緒に立った姿で写っている。その左手にはエゴと現在同居している9才の孫娘（L）の写真が掛けられている。その横（左手）は二枚の写真が入った額（KL）である。一枚は孫Kの写真で、もう一枚は先ほどの孫娘Lの赤ちゃん時代の写真である。次の額（FGH）には三枚の写真が収められている。上方の大きい写真は現在エゴと離れて住んでいるふたりの息子とひとりの娘が三人一緒に写った子供時代（約30年前）の写真（FGH）である。その下の二枚はそれぞれグエイサラ祭とラマ5世祭のときに撮られた写真である。（誰が写っているのかは不明）最後の額はエゴの息子の顔写真（H1）であり、そのすぐ下にはこの息子の僧資格を示す証明書が三枚額に入れて飾ってある。息子は12才で僧籍には入り20才までこれを継続している。

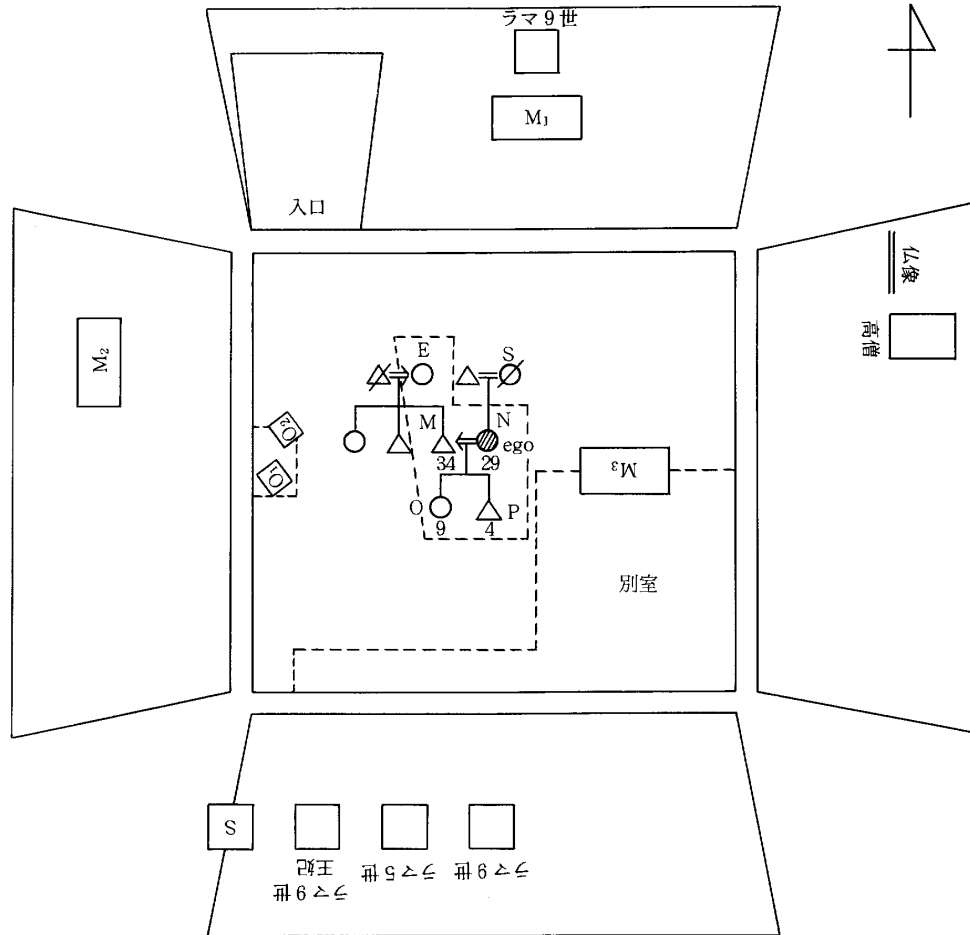
目をその次の壁（入口正面、南側）に移すとここにも王族カレンダーが掛けられている。また居間から台所へ抜ける通路にあたる東壁には先ほどの息子の僧時代の写真（H2）とエゴの夫（C）の顔写真が並べて掛けてある。

事例3

事例3は事例2の西隣にある家屋でエゴ（N）は事例2のインフォーマントの妹Eの息子Mの嫁である。軍人の夫との間に娘と息子をひとりずつもうけ、夫の実母（インフォーマントの妹）と5人で暮らしている。家屋は近代的なコンクリート・レンガ作りでほんの最近建てられた様子である。

壁の写真の展示は隣家に比べると比較的簡素である。北東隅に仏像を飾った棚があり、それにそった東側壁には隣家と同じ地域の高僧の写真が飾られている。北側の壁には王の写真と夫の軍隊時代の集合写真（M1）が飾られている。西側の壁には夫の軍隊時代の集合写真（M

事例 3



2) が掛けられ、その下の小さなガラスケースの上には9才時と幼稚園入園時の娘の写真 (O 1, O 2) が写真立てに入れられて飾ってある。その後ろには夫の軍隊での資格証が額に入れて二枚立てである。西北隅にある入口から入ると、その突き当たり正面に天井までとどく作り付けの大きな飾り棚がある。ここにはまず、正面上方に額に収められたラマ5世の肖像画、それを両方から挟むかたちで左に現王ラマ9世、右に王妃の写真が配されている。下の棚には真中のテレビを挟んで夫の軍隊での資格証がそれぞれ一枚ずつ立てて置かれてある。正面からは見えにくい棚の右端の陰になる位置にはエゴの亡くなった母親の写真 (S) が飾られている。国王の写真をはさんで南側の壁にも夫の軍隊時代の集合写真 (M 3) が飾られている。

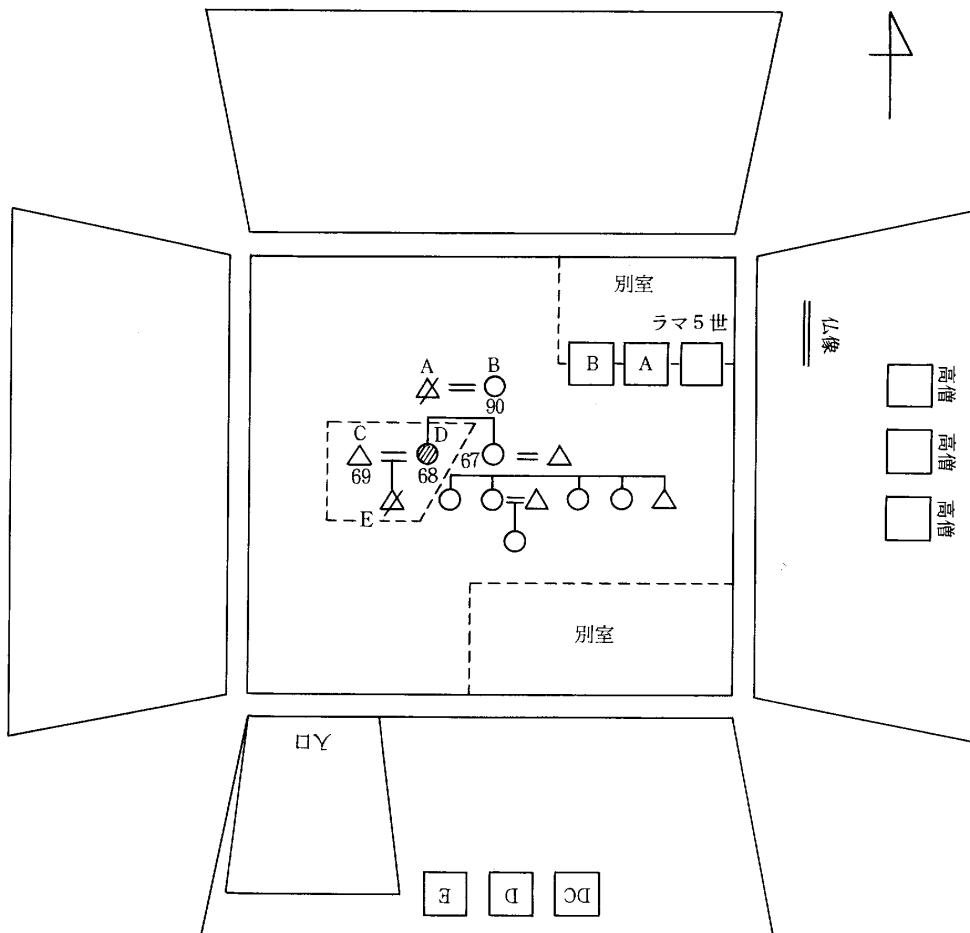
前述したようにこの事例では全体に飾ってある写真の数は少ない。しかし、王族と僧の写真は欠落してはいない。夫の職業的なプライドを示すような写真や資格証が多く見受けられる一方で、娘の写真は置かれていても下の息子 (4才) の写真が表に出されていないのが不思議に感じられる。また、親族関連の写真もエゴの亡くなった母親以外まったく見られない。

事例4

近代的な家屋である。入口のたたきも階段もコンクリートづくりで、家の内側はつやのある壁板が使用されている。エゴは現在69才になる夫とふたり暮らしである。息子が一人あったが若い頃に死亡している。この居間に飾られた写真はそれほど多くない。仏像の祭壇は北東隅にある。電気で照明する立派なものである。仏像を据えた東側壁には三枚の高僧の写真が飾られている。それぞれ異なる人物である。居間の南側の壁には亡くなったエゴの息子（E）とエゴが自宅前で撮った写真（D）、そしてエゴと夫が仏前で一緒に写った写真（C）が並べて飾られている。仏像の祭壇に接した北側の壁には仏像に近い方から、ラマ5世の肖像、エゴの亡くなった父親の写真（A）、その隣にはエゴの母親（生存）の顔写真（B）が飾られている。

この事例の場合も王族と僧は居間の中心的位置に掲げられているが、中でも僧の写真が中心に飾られ、王族はその周辺に配されているのが特徴的である。また死亡した父親と生存している母親の写真が同じ様に額に入れて並べて飾られてあり、写真の展示形態において死者と生者との間になんら違いをもうけていないように思われた。

事例 4

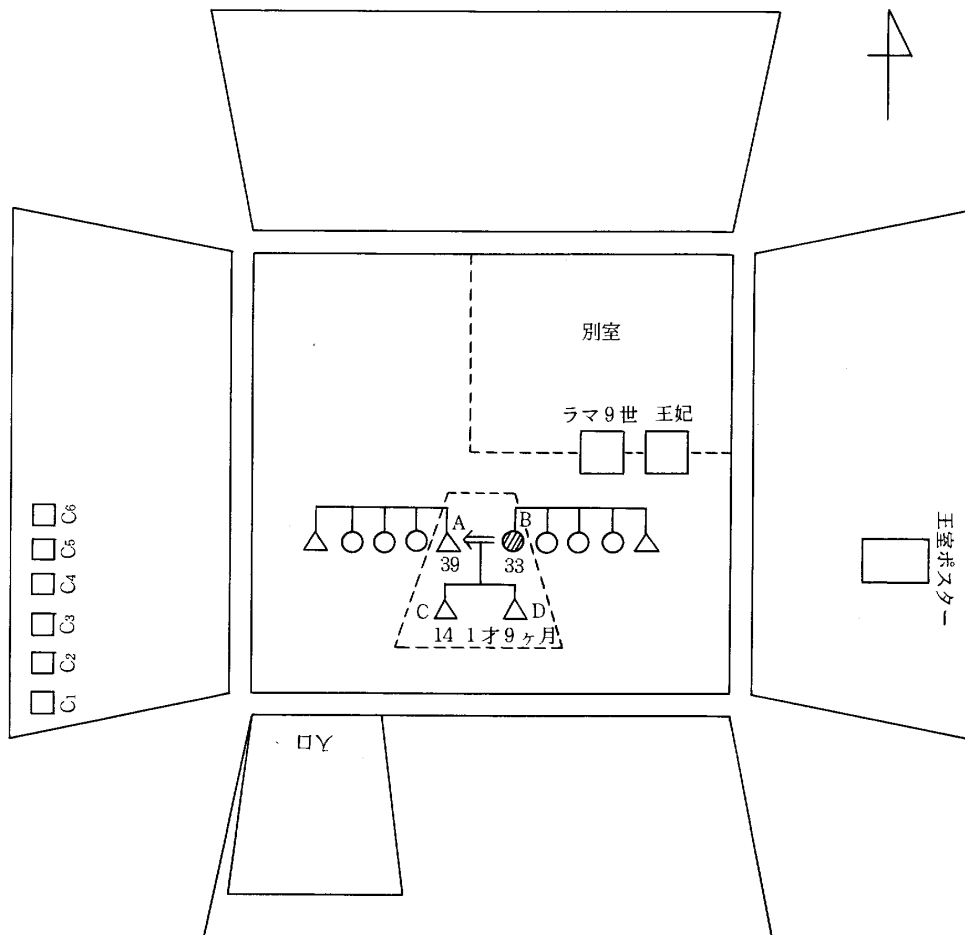


事例 5

この事例の場合、写真の数は比較的少なく種類も限定されている。家屋は典型的な北タイの農村の高床式で、床下には作業や休息ができる十分な高さがある。高い階段を登ってゆくと入口のすぐ左手（西側壁）の上にエゴの子供の写真（C1、C2、C3、C4、C5、C6）が飾ってある。いずれも小型の額に入ったものである。エゴにはふたりの息子（14才、1才9ヶ月）があるが、ここに飾られているのはいずれも長男のものばかりである。次男の写真を見せてくれるように頼むと数葉の赤ん坊時代の写真を出してくれたので、次男の写真が全く無いわけではなく、ただ飾っていないだけであることがわかる。壁面に飾ってある長男の写真は、生後6ヶ月の頃のものから9才時のものまで合計6枚である。2才の頃のナップが3枚あり、6才の頃の写真は幼稚園の入園時に撮ったものである。

エゴに次男の写真を飾っていない理由を問うと、特に意味はなく単にエゴが忙しくてそのような余裕がないだけとのことであった。写真としての展示は見られなかったが、王族のポスターや現王と王妃のポスターは東側の壁に貼られてあった。しかし、ここの居間には僧侶の写真や仏像が欠落しており全体的に見てもめずらしい事例である。

事例 5



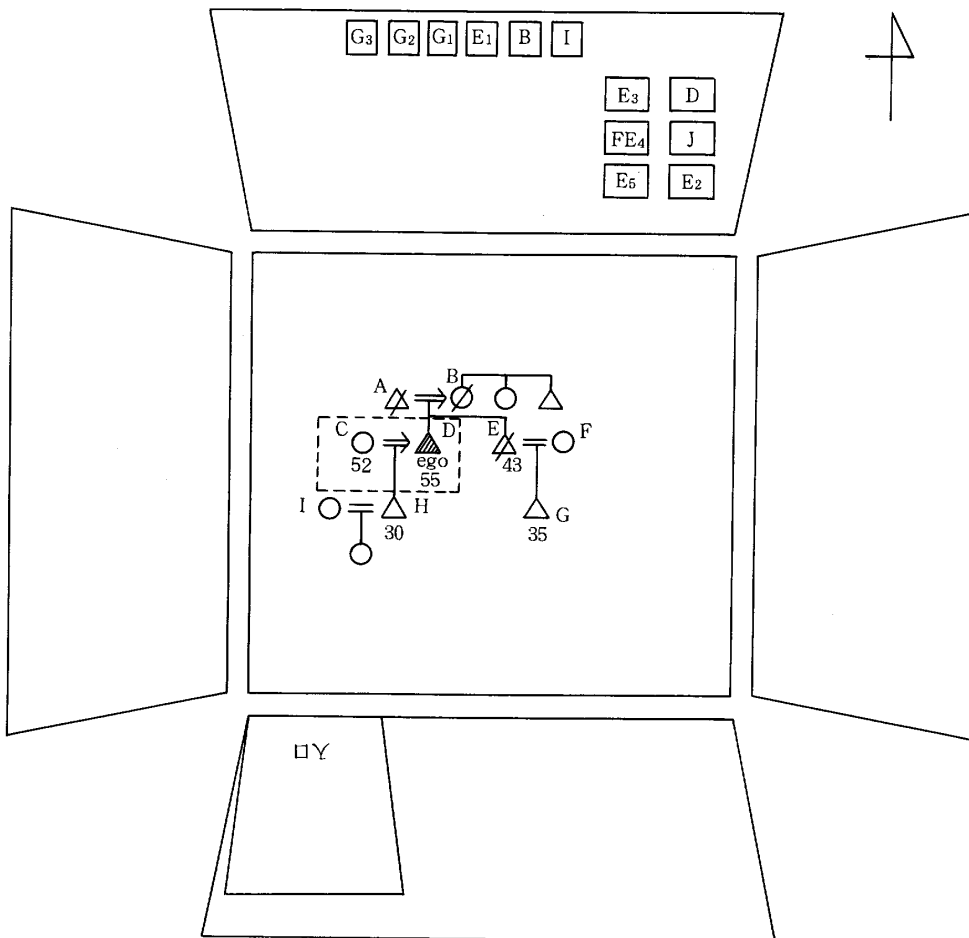
事例 6

事例 6 の家屋は伝統的な高床様式を保っている。エゴ (55才、男性) はふたり兄弟の長男で、弟は43才で死亡している。エゴと妻の間にはすでに結婚した30才になるひとり息子があり、死亡した弟にもひとり息子 (35才) がある。エゴはこの男児をその父親 (エゴの弟) が死亡した際に一時的に育てている。結婚後の居住様式は、父の世代には父が母の家へ婚入し、エゴの世代には妻が自分のところへ婚入してきている。

この家庭の壁面には仏像や僧侶、あるいは王族関係の写真やポスターが全く見あたらない。その詳しい理由は不明である。したがって壁面構成は家族写真が中心となる。これらの写真があるのは居間の北側の壁で、大小のばらつきはあるもののすべて額に収められた形で飾られている。もうひとつの特徴としては死亡した弟の息子の写真が多く飾られているという点であるが、これは弟の死亡時に兄であるエゴがこの子を引き取ってしばらく親代わりで養育したという経緯と関係があると思われる。

北側の壁の上方には右からエゴの息子の妻の写真 (I)、エゴの母 (B)、死亡した弟の写真

事例 6



北タイ農村家庭における壁面写真とその構成

(E 1) がそれぞれ一枚ずつ、つづいて弟の息子の写真が二枚 (G 1、G 2) 飾られている。その横には同じく弟の息子の軍隊時代の集合写真 (G 3) が飾られている。

これらの写真群の右下方にもう一群の写真群が飾られている。ここにはエゴ自身の軍隊時代の顔写真 (D)。エゴの軍隊時代の親友の写真 (J)。死亡した弟の僧時代の写真 (E 2)。彼の軍隊時代の写真 (E 3)。その下の額には弟の軍隊時代の写真 (E 4) とその妻の写真 (F) と対になるように収められている。最後がやはり弟の軍隊時代の写真 (E 5) である。

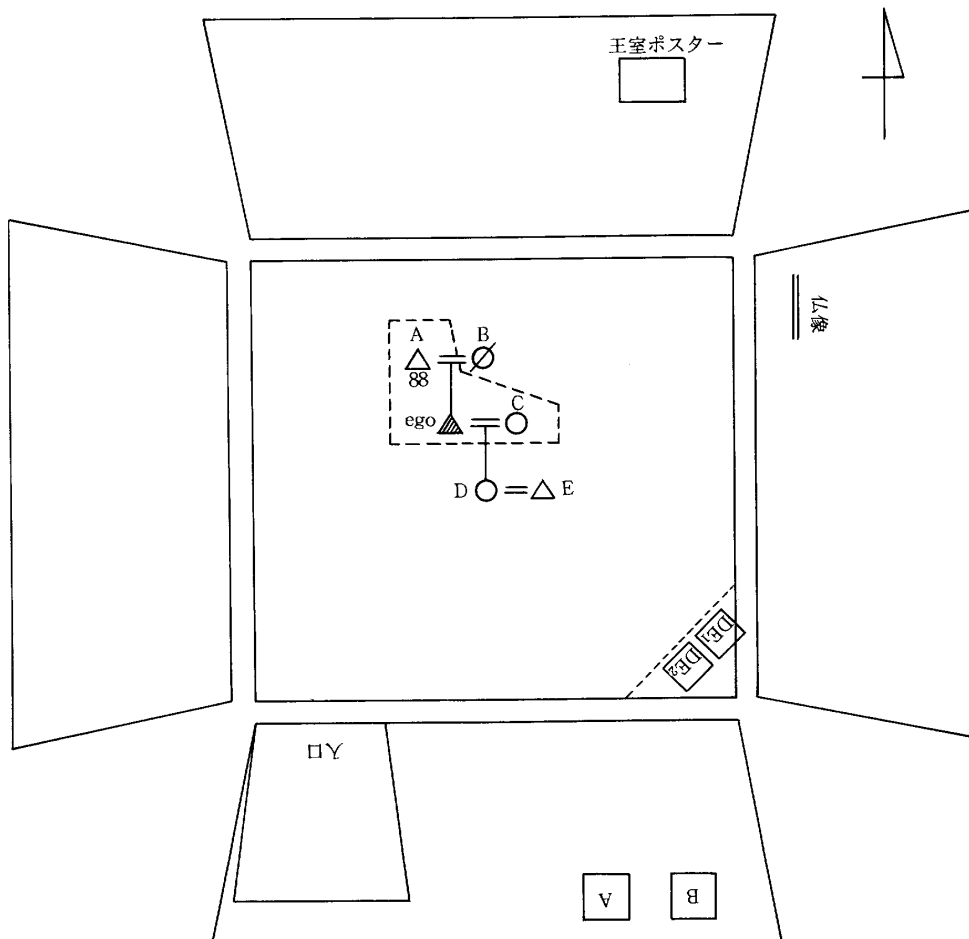
重要と思われるエゴのひとり息子の写真はここには無く、別の小さなアルバムの中にまとめて収められていた。彼は現在、村から40キロ程離れた所でビル建設の仕事に従事している。

全体的に顔写真や全身写真でも直立して正面を向いたものや銃を手にしてポーズをとったものばかりで、いわゆるスナップ写真は壁面には見あたらない。

事例7

調査集落のプーヤイバン (村長) の家庭の事例である。新しい家屋で高床ではあるが、床下を作業や休息に使用することは出来ない。上がり口や階段もコンクリートづくりで室内は全体

事例7



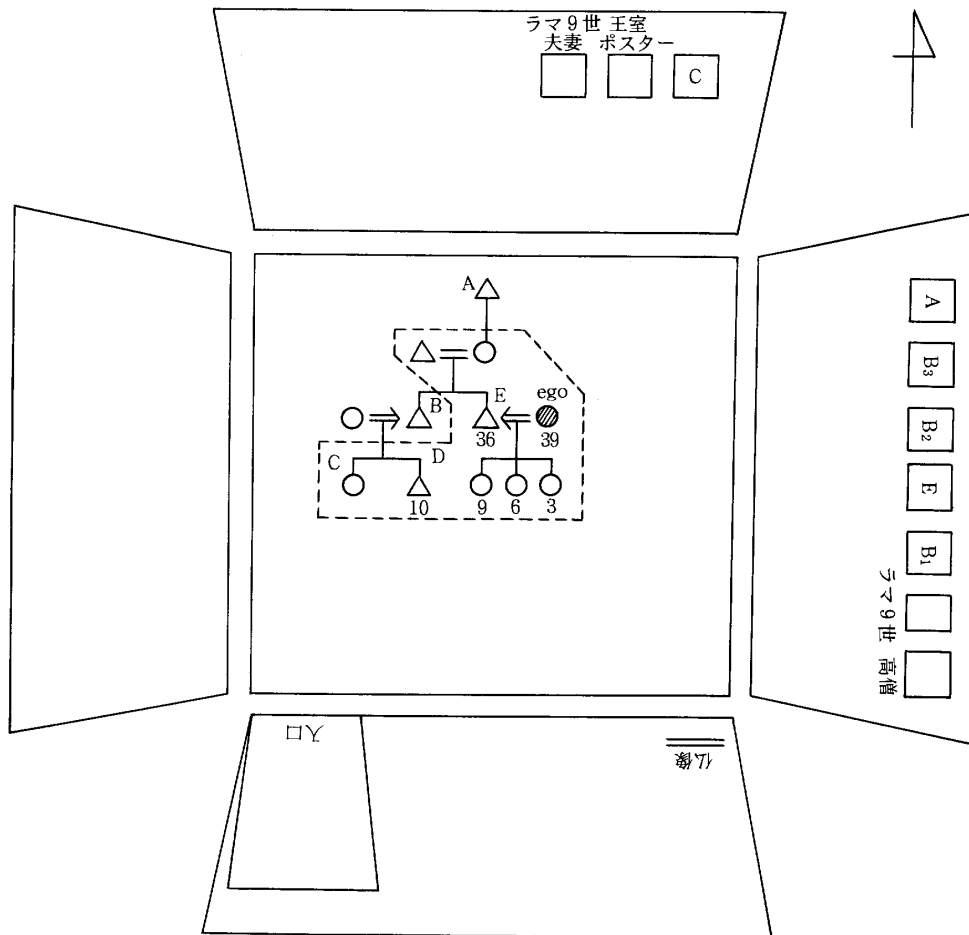
に内壁が張られている。北東隅には仏像安置のための棚があり、その横、北側壁には王族の写真が飾られている。家族の写真は南東隅にあり、一枚は9ヶ月前に結婚したひとり娘の結婚式のときの集合写真(D)でもう一枚は娘とその夫のふたりで撮った写真(DE)である。南側壁の上方にはエゴの父母の写真(A, B)が飾られてある。父は88歳で今も健在であるが、母はすでに死亡している。生者の写真と死者の写真がここでも同じ様に並べて飾られている。また、これまでの事例では見ることのできなかつた結婚式の写真がここには飾られてあった。

事例8

伝統的なタイ農村の高床式家屋である。屋外から打ち付けられた外壁の裏側がむきだしの状態でそのまま内壁となっている。高い階段を登って居間に入ると正面の北側壁に小さな仏像が安置されてある。エゴは夫のところへ婚入してきた。夫の両親と自分の3人の娘、そしてよそで働いている夫の兄から預かっているふたりの子供の9人世帯である。

ここの居間に飾られた写真は合計6枚でそれほど多くはない。うち5枚は東側の壁に飾られており、残り1枚は北側壁に飾られている。大きな仏像を飾った棚は東北隅の床に据えられ電

事例8



気もともるようになってきている。東壁を構成している写真は仏像に近い方から、まず、エゴの夫の兄の僧時代の写真（B 1）。次に、夫の子供の頃の写真（E）。さらに2枚続けてエゴの夫の兄の僧時代の写真（B 2, B 3）があり、その2枚目は彼を含んだ僧の集合写真である。仏像から最も遠いところには夫の母方祖父の写真（A）が飾ってある。最後に北側壁にあるのが同居している夫の兄の息子の姉の赤ん坊時代の写真（C）そして王室関係の肖像画（ポスター）である。

3、上記事例における暫定的検討

以上、紹介した事例を通して、タイの農村家庭の壁面写真にはどのような特徴が見られるのか。あるいはそこからどのような家族観あるいは世界観が読み取れるのか。とりあえず現段階における暫定的な所見を以下に列挙して今回の資料紹介の結論に代えることにしたい。

国王・王室の写真の家庭への普及

まず、ほとんどの家庭の壁面に王や王族の写真や肖像が飾ってある。そして、それらはほとんどの場合、壁面の中央や最上部に位置する所に飾られる。タイにおける王（王室）は国民生活において絶大な影響力を持っている。特に国王は立憲君主制のもとでの国家元首であり、また、実質的な国教としての仏教の最高の擁護者である。国王はタイ社会における聖俗両面における権威の源であり、民族統合のシンボルなのである。いわゆる「ラック・タイ」＝タイ原理は、このような民族と仏教と国王との緊密な関係を表現するものである。そして国民はタイ人としてのアイデンティティーを国王を通して確認する。各家庭に飾られた国王（王室）の写真や肖像そしてカレンダーは、かつての天皇制下の日本の「御真影」のように、王権と国民とを結びあわせ、タイ人としてのアイデンティティーのよりどころとするための視覚的メディアとしての役割を果たしていると思われる。

高僧写真の家庭への普及

国王（王室）とともに家庭の居間の壁の中心的位置を占めているもうひとつの要素が高僧の写真である。多くの家庭では、その地域あるいは国内的に著名な高僧の写真が国王と同様、壁面の中央や高いところに掛けられている。ここに紹介した事例の中には、たまたま高僧の写真が欠落した家庭もあるが、筆者が調査期間中に訪問することが出来たほとんどの家庭にこの種の写真を見ることが出来た。

タイ社会においてはその約95%が仏教徒であり、仏教は実質的に国教と同様の位置づけを持っている。このことからタイ人の価値観や行動規範は仏教教義の強い影響を受けている。学校教育を通して、あるいは日常の宗教実践を通して、人々は深くそして自然に仏教的イデオロギーを身につけてゆく。各家庭の仏像や高僧の写真は、タイの人々の仏教的世界観の形成に不可欠な崇拜の対象としてかかげられているのである。また、写真群の飾られる方位としては東壁に集中しており、これは仏像の据えられる方位（東向き）に対応していると思われる。

天皇の「御真影」とタイの国王の写真

松本健一（1984）によると明治から昭和にかけての天皇制下の日本では、教育勅語が天皇制のイデオロギー的側面を請け負っていたのに対し、天皇の写真は「御真影」として大衆のエトス（心性）のうちに天皇の原像をかたちづくる役割をになっていた。「御真影」は天皇制国家において天皇と大衆とを結ぶひとつの手段としてあった。タイの家庭や職場に掲げられている国王や王室の写真もかつての「御真影」に近い機能を果たしていると思われる。ただ、日本の天皇が単なる政治的権威だけでなく「現人神」として宗教的な聖性も保持していた点は、国民の生活や福祉活動に積極的取り組みながらその人間性を強調するタイの国王や王室と異なっている。

タイの場合、国王は政治的な最高権力者として世俗的な世界に身を置いている。たまさかそれが何らかの宗教性を帯びていたにしても、それはあくまでも諸宗教の擁護者としてのものであり、かつての天皇のような神性は見出し得ない。かつての「御真影」に示された天皇の神的側面あるいは聖性は、タイ社会の場合、国王と並んでかかげられた高僧の写真のなかに分化した機能として見だし得るのかもしれない。タイ社会ではかつての「御真影」に合わせ示されていた政治的権威と宗教的権威とが、それぞれ国王と高僧の写真によって分有される構造になっているように思われる。

壁面上における写真群の住み分け

家族の写真群と国王や王室、高僧の写真群とは壁面上ではそれぞれ区別された空間領域を占めている。国王や王室、高僧の写真群が全体として居間の正面の壁面中央や天井に近い高いところに飾られる傾向があることは、今回の事例にもよく示されている。国王や王室、高僧の写真が「特別なもの」として認識され、家族写真のような私的な領域とは区別されて捉えられていることが、空間配置において表現されている。例えば、事例2ではふたつの写真群の住み分けが、居間の西半分の壁と東半分の壁という居間全体の分割によって比較的明瞭に実現されていることが分かる。

「遺影」観念の有無（生者と死者の共存）

壁面上に親族の写真を飾る際、死亡した者と生存中の者が同じような形式で飾られていることが多い。日本社会においては死亡した者の顔写真（上半身）は「遺影」として特別な意味づけを与えられ、黒い縁をつけるとか天井近くに上げるとかそれに応じた飾り方で識別される。今回の調査で興味深かったのは、死亡した者の写真と生存中の者のそれが隣り合いながらもまったく同型の額に収められて飾ってある様子であった。事例4と事例7にその具体例が典型的に示されている。遺影の観念の欠落と見るべきか、あるいは写真文化の浸透度の浅さとして捉えるべきか、結論はさらに詳細な研究を待たなければならない。

葬儀の写真の展示

ここでの事例には含まれないが、訪問した他の家庭の壁面写真を注意して見ていると葬儀の時に撮った写真が時おり見られた。たいていは火葬の前に棺の前で撮られた集合写真である。日本社会で生まれ育った者にとっては居間の壁面に葬儀の写真飾るということは非常に奇異にうつる光景であり、強く印象づけられるものがある。葬儀に対する感覚の違いか、あるいは先述した写真文化の浸透度の浅さから来るものなのか、現段階では明確な意見を持ち得ていない。もちろん事例1で紹介したように小さなアルバムの中に収められている場合もある。

家屋の継承ラインと写真の照応

死亡した親族の写真と家屋の継承とは一致する傾向がある。すなわち、今回の事例で見る限り家屋の継承者（妻あるいは夫）方の父母や祖父母などの写真が、優先的にあるいは排他的に壁面に展示されているのである。事例2では家屋はエゴがその母親から継承したものである。夫はエゴの家に婚入してきた。ここに飾ってある父母の写真はエゴすなわち妻方のもののみであり、夫方のそれはまったく見あたらない。事例3では例外的に婚入してきた側の親（死亡した母）の写真が飾ってあったが、正面の作り付けの棚の台所に向けた側面にかけてあり、通常は見えにくい位置に配されていた。事例4ではエゴのところに夫が婚入する妻方居住の形態をとっている。この居間に飾ってあるのもすべて妻方の父母の写真であり、夫方のものは全く無い。

事例6はこれまでとは反対に、エゴ（妻）が婚入する夫方居住の例であるが、やはり飾られている写真はすべて夫方の父母の写真であり、妻方のものは無い。事例7も夫方居住であり、夫方の父母の写真のみが飾ってある。事例8も夫方居住で、夫方の父母の写真はないが、夫方の祖父の写真はある。以上、限られた事例ではあるが家屋の継承ラインと写真の継承ラインとの間に平行関係があるように思われるのである。もし、この傾向がある程度明確な慣習としてあるとすれば、北タイの農村家庭の壁面写真は家屋の継承や結婚後の居住形態を知る上で、また家族イデオロギーの一端を読み取る上できわめて有効な資料となるだろう。

子供の写真の展示

子供の写真はどこの家庭でも積極的に飾られる。事例5のように他の写真はなくても子供の写真だけは飾られている場合もある。少なくとも、ここに紹介した事例の全てにおいて子供の写真は登場する。タイでは近年の家族計画の浸透によって少子化が進みつつある。一家庭内の子供数の減少は、ひとりひとりの子供に対する細かい配慮や関心の増大を生み出すことを予想させる。ブルデューの指摘では子供の誕生は写真機購入の決定的な契機となっている。子供を写した写真の存在もそうした子供に対するある特別な意識の指標のひとつとして捉えることが出来るだろう。

出家と軍隊経験

壁面写真を見る限り出家と軍隊の経験は、写真として残し、また家庭の居間に飾るにふさわしいものとして考えられている。軍隊経験の写真は事例3と事例6において見ることができる。特に事例3では軍隊時代の集合写真が居間の三面にかかげられ、また軍隊時代に得た資格証なども上質な額に収められて居間の各所に置かれている。居間を他者の視線を前提とする居住空間として考えるとき、これらの展示物や写真は個人におけるひとつの威信を示すための視覚メディアとしての役割を果たしている。

出家していた頃の写真を飾ることも軍隊時代の写真の展示と同様な意義を持つ。タイ社会においては、伝統的に男子は一生のうちに一度は出家することが期待されている。特に男子にとって出家は心身ともに成熟した大人として社会的に承認されるための通過儀礼として、人生のライフサイクルのなかで重要な位置を占めてきた。出家と軍隊の経験がともに男子にとっての通過儀礼としての側面を持つとすれば、これらの写真は男子の成長過程の重要な一時期を記念している。さらに、軍隊経験が国家に対する忠誠を表すとすれば、出家経験は国民の精神的な基本理念である仏教の尊奉を表している。これらの写真は誇るべき個人的経験を記念するだけでなく、国民全体が共有すべき規範を遵守していることを公に示す手段としての役割も果たしていると思われる。

スナップ写真とポーズ写真

壁面に掛けられている写真は近親の顔写真や半身写真が中心であり、いわゆる改まった直立姿勢で撮られたものも多い。祭や様々な記念式典、葬儀の際の写真も集合写真の形態をとって額に入れて飾られている。少なくとも、日常の自然な姿を写したスナップ写真が壁面に飾られることはない。あったとしても額の片隅に副次的に収められているにすぎない。これはスナップ写真といわゆるポーズ写真とが異なる観念で捉えられていることを示している。北タイ農村家庭の壁面において、飾られるにふさわしいのはポーズ写真であり顔写真である。写真展示の場としての居間の壁面は、あくまで公に開かれた空間であり、ここではスナップ写真の被写体となるような人々の幸福観にそった日常の断片は紹介されていない。そこでは家族や親族成員をアイデンティファイするための標示的写真が展示される。あるいは何らかの記念日といった非日常的な人生の場面が掲げられる。壁面展示におけるこの仕分けは、前述したように、写真が家庭の壁面に飾られるまでの二重の選択過程が生み出した結果としてある。少なくとも北タイ農村家庭の壁面は、対外的な視線を前提として、その家庭にとって関連の深い構成員の紹介とその構成員が参加した公的あるいは共同体的な契機を中心とする写真群によって構成されているといえる。

写真は世界の再現であるばかりでなく世界の再構築の手段でもある。ソントグに言わせれば、これは世界の「支配」あるいは「再定義」ということになる。今回の資料をもとにあたためられている最終的な到達点も、居間の壁面の写真や図象によるタイの人々の世界の再構築の実践およびそこに生成する世界の解説にある。小論での事例紹介と暫定的な検討においては、未だ統一性を欠いた断片的印象の羅列に終始しているにすぎないが、それぞれの項目ごとにタイ社会の世界観や家族観にかかわる興味深いテーマが潜在していることをある程度明らか

北タイ農村家庭における壁面写真とその構成

にすることが出来たと思われる。それらの本格的な分析は別稿にゆずるとして、今回はとりあえず、現地資料の紹介を通してタイの農村家庭に飾られた写真群の持つ研究価値についての若干の示唆にとどめておくことにしたい。

謝 辞

今回の資料は、財団法人アジア・太平洋センター自主研究（B1プロジェクト）「タイ社会における伝統的価値観とその変容に関する文化人類学的研究」（研究主査：丸山孝一九州大学教育学部教授）の一環として実施された海外学術調査（1993年10月～11月）および筆者個人で行なった同一地域での補充調査（1994年8月）において収集されたものの一部である。なお二回の調査の準備段階において、大分大学教育学部の平田利文助教授（比較教育学）からは貴重な資料の紹介や御教示をいただいた。記して感謝いたします。

参考文献

Boerdam, J. and Martinius, W. O.

1980 Family Photographs – A Sociological Approach – , The Netherlands Journal of Sociology, Vol 11 (95–119)

ブルデュー、P（山縣 照 他訳）

1990『写真論－その社会的効用－』、法政大学出版局

真鍋祐子

1990「巫神図－神々の家族写真－」、『比較民俗研究』2号

松本健一

1984「天皇の写真」、『ユリイカ』12巻10号、青土社

Plath, D, W.

1994「文化人類学的観点から身近なメディアの威力を考える」（平成6年10月27日、熊本学園大学経済学部海外事情研究所研究会における口頭発表）

坂元一光

1993「写真の人類学のために－第三世界の家族写真研究に関する覚書－」、『大分県立芸術文化短大研究紀要』第31巻

佐藤友光子

1989「家族写真と家族研究－写真資料の有用性と問題点についての考察－」、『社会学年誌』30、早稲田大学社会学会

ソントグ、S.（近藤耕人訳）

1992『写真論』、晶文社